

東京大学・理科

試験日 年月日 時間分 (出題範囲)

- 1** (1) 正の整数 k に対し、

$$A_k = \int_{\sqrt{k\pi}}^{\sqrt{(k+1)\pi}} |\sin(x^2)| dx$$

とおく。次の不等式が成り立つことを示せ。

$$\frac{1}{\sqrt{(k+1)\pi}} \leq A_k \leq \frac{1}{\sqrt{k\pi}}$$

- (2) 正の整数 n に対し、

$$B_n = \frac{1}{\sqrt{n}} \int_{\sqrt{n\pi}}^{\sqrt{2n\pi}} |\sin(x^2)| dx$$

とおく。極限 $\lim_{n \rightarrow \infty} B_n$ を求めよ。

- 2** 黒玉 3 個、赤玉 4 個、白玉 5 個が入っている袋から玉を 1 個ずつ取り出し、取り出した玉を順に横一列に 12 個すべて並べる。ただし、袋から個々の玉が取り出される確率は等しいものとする。

(1) どの赤玉も隣り合わない確率 p を求めよ。

(2) どの赤玉も隣り合わないとき、どの黒玉も隣り合わない条件付き確率 q を求めよ。

- 3** a を実数とし、座標平面上の点 $(0, a)$ を中心とする半径 1 の円の周を C とする。

(1) C が、不等式 $y > x^2$ の表す領域に含まれるような a の範囲を求めよ。

(2) a は (1) で求めた範囲にあるとする。 C のうち $x \geq 0$ かつ $y < a$ を満たす部分を S とする。 S 上の点 P に対し、点 P での C の接線が放物線 $y = x^2$ によって切り取られてできる線分の長さを L_P とする。 $L_Q = L_R$ となる S 上の相異なる 2 点 Q, R が存在するような a の範囲を求めよ。

- 4** 座標空間内の 4 点 $O(0, 0, 0), A(2, 0, 0), B(1, 1, 1), C(1, 2, 3)$ を考える。

(1) $\vec{OP} \perp \vec{OA}, \vec{OP} \perp \vec{OB}, \vec{OP} \cdot \vec{OC} = 1$ を満たす点 P の座標を求めよ。

(2) 点 P から直線 AB に垂線を下ろし、その垂線と直線 AB の交点を H とする。 \vec{OH} を \vec{OA} と \vec{OB} を用いて表せ。

(3) 点 Q を $\vec{OQ} = \frac{3}{4}\vec{OA} + \vec{OP}$ により定め、 Q を中心とする半径 r の球面 S を考える。 S が三角形 OHB と共有点を持つような r の範囲を求めよ。ただし、三角形 OHB は 3 点 O, H, B を含む平面内にあり、周とその内部からなるものとする。

- 5** 整式 $f(x) = (x-1)^2(x-2)$ を考える。

(1) $g(x)$ を実数を係数とする整式とし、 $g(x)$ を $f(x)$ で割った余りを $r(x)$ とおく。 $g(x)^7$ を $f(x)$ で割った余りをと $r(x)^7$ を $f(x)$ で割った余りが等しいことを示せ。

(2) a, b を実数とし、 $h(x) = x^2 + ax + b$ とおく。 $h(x)^7$ を $f(x)$ で割った余りを $h_1(x)$ とおき、 $h_1(x)^7$ を $f(x)$ で割った余りを $h_2(x)$ とおく。 $h_2(x)$ が $h(x)$ に等しくなるような a, b の組をすべて求めよ。

- 6** O を原点とする座標空間において、不等式 $|x| \leq 1, |y| \leq 1, |z| \leq 1$ を表す立方体を考える。その立方体の表面のうち、 $z < 1$ を満たす部分を S とする。

以下、座標空間内の 2 点 A, B が一致するとき、線分 AB は点 A を表すものとし、その長さを 0 と定める。

(1) 座標空間内の点 P が次の条件 (i), (ii) をともに満たすとき、点 P が動きうる範囲 V の体積を求めよ。

(i) $OP \leq \sqrt{3}$

(ii) 線分 OP と S は、共有点を持たないか、点 P のみを共有点を持つ。

(2) 座標空間内の点 N と点 P が次の条件 (iii), (iv), (v) をすべて満たすとき、点 P が動きうる範囲 W の体積を求めよ。必要ならば、 $\sin \alpha = \frac{1}{\sqrt{3}}$ を満たす実数 α ($0 < \alpha < \frac{\pi}{2}$) を用いてよい。

(iii) $ON + NP \leq \sqrt{3}$

(iv) 線分 ON と S は共有点を持たない。

(v) 線分 NP と S は、共有点を持たないか、点 P のみを共有点に持つ。

1 **数学III** 【定積分と不等式】 **難**

▶解答◀ (1) $x^2 = t$ とおくと、いま積分区間は正であるから、 $x = \sqrt{t}$ である。 $dx = \frac{dt}{2\sqrt{t}}$

x	$\sqrt{k\pi} \rightarrow \sqrt{(k+1)\pi}$
t	$k\pi \rightarrow (k+1)\pi$

$$A_k = \int_{k\pi}^{(k+1)\pi} |\sin t| \frac{dt}{2\sqrt{t}}$$

さらに $u = t - k\pi$ とおくと、 $du = dt$ で

t	$k\pi \rightarrow (k+1)\pi$
u	$0 \rightarrow \pi$

$$A_k = \int_0^\pi |\sin(u + k\pi)| \frac{du}{2\sqrt{u + k\pi}}$$

$$= \int_0^\pi \frac{|\sin u|}{2\sqrt{u + k\pi}} du = \int_0^\pi \frac{\sin u}{2\sqrt{u + k\pi}} du$$

これより

$$\frac{1}{2\sqrt{(k+1)\pi}} \int_0^\pi \sin u du \leq A_k$$

$$\leq \frac{1}{2\sqrt{k\pi}} \int_0^\pi \sin u du$$

であり、

$$\int_0^\pi \sin u du = [-\cos u]_0^\pi = 2$$

も合わせると、

$$\frac{1}{\sqrt{(k+1)\pi}} \leq A_k \leq \frac{1}{\sqrt{k\pi}}$$

(2) $B_n = \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n}^{2n-1} \int_{\sqrt{k\pi}}^{\sqrt{(k+1)\pi}} |\sin(x^2)| dx$

$$= \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n}^{2n-1} A_k$$

であるから、(1) より

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n}^{2n-1} \frac{1}{\sqrt{(k+1)\pi}} \leq B_n \leq \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n}^{2n-1} \frac{1}{\sqrt{k\pi}} \dots \textcircled{1}$$

ここで、

$$\frac{1}{\sqrt{(k+1)\pi}} \geq \frac{1}{\sqrt{\pi}} \cdot \frac{2}{\sqrt{k+1} + \sqrt{k+2}}$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{k+2} - \sqrt{k+1})$$

$$\frac{1}{\sqrt{k\pi}} \leq \frac{1}{\sqrt{\pi}} \cdot \frac{2}{\sqrt{k} + \sqrt{k-1}}$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{k} - \sqrt{k-1})$$

であるから、 $\textcircled{1}$ の左辺は

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n}^{2n-1} \frac{1}{\sqrt{(k+1)\pi}}$$

$$\geq \frac{1}{\sqrt{n}} \cdot \frac{2}{\sqrt{\pi}} \sum_{k=n}^{2n-1} (\sqrt{k+2} - \sqrt{k+1})$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} \cdot \frac{1}{\sqrt{n}} (\sqrt{2n+1} - \sqrt{n+1})$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} \left(\sqrt{2 + \frac{1}{n}} - \sqrt{1 + \frac{1}{n}} \right)$$

$$\rightarrow \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{2} - 1) \quad (n \rightarrow \infty)$$

$\textcircled{1}$ の右辺は

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n}^{2n-1} \frac{1}{\sqrt{k\pi}}$$

$$\leq \frac{1}{\sqrt{n}} \cdot \frac{2}{\sqrt{\pi}} \sum_{k=n}^{2n-1} (\sqrt{k} - \sqrt{k-1})$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} \cdot \frac{1}{\sqrt{n}} (\sqrt{2n-1} - \sqrt{n-1})$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} \left(\sqrt{2 - \frac{1}{n}} - \sqrt{1 - \frac{1}{n}} \right)$$

$$\rightarrow \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{2} - 1) \quad (n \rightarrow \infty)$$

よってハサミウチの原理より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} B_n = \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{2} - 1)$$

◆別解◆ 【区分求積法】

$\textcircled{1}$ の左辺は

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n+1}^{2n} \frac{1}{\sqrt{k\pi}} = \frac{1}{\sqrt{\pi}} \cdot \frac{1}{n} \sum_{k=n+1}^{2n} \frac{1}{\sqrt{\frac{k}{n}}}$$

$$\rightarrow \frac{1}{\sqrt{\pi}} \int_1^2 \frac{dx}{\sqrt{x}} = \frac{1}{\sqrt{\pi}} [2\sqrt{x}]_1^2$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{2} - 1) \quad (n \rightarrow \infty)$$

$\textcircled{1}$ の右辺は

$$\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{k=n}^{2n-1} \frac{1}{\sqrt{k\pi}} = \frac{1}{\sqrt{\pi}} \cdot \frac{1}{n} \sum_{k=n}^{2n-1} \frac{1}{\sqrt{\frac{k}{n}}}$$

$$\rightarrow \frac{1}{\sqrt{\pi}} \int_1^2 \frac{dx}{\sqrt{x}} = \frac{1}{\sqrt{\pi}} [2\sqrt{x}]_1^2$$

$$= \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{2} - 1) \quad (n \rightarrow \infty)$$

となるから、ハサミウチの原理より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} B_n = \frac{2}{\sqrt{\pi}} (\sqrt{2} - 1)$$

2 **数学A** 【確率の雑題】 **標準**

▶解答◀ 黒玉 3 個、赤玉 4 個、白玉 5 個の順列は $\frac{12!}{3!4!5!} = 3 \cdot 7 \cdot 10 \cdot 11 \cdot 12$ 通りある。

(1) 黒玉 3 個、白玉 5 個をまず並べる。この順列は $\frac{8!}{3!5!} = 8 \cdot 7$ 通りある。この 8 個の間または端の 9 か所

のうち4か所に赤玉を入れる組合せは ${}_9C_4 = 3 \cdot 7 \cdot 6$ 通りある.



よって求める確率は

$$p = \frac{8 \cdot 7 \cdot 3 \cdot 7 \cdot 6}{3 \cdot 7 \cdot 10 \cdot 11 \cdot 12} = \frac{14}{55}$$

(2) 白玉をまず並べ(1通り), そこで赤玉をどのように入れるかで場合分けする.

- (ア) 1か所に赤玉を4つとも入れる場合
- (イ) 2か所に赤玉4つを分けて入れる場合
- (ウ) 3か所に赤玉4つを分けて入れる場合
- (エ) 4か所に赤玉を1つずつ入れる場合

以下, 図中では白玉を W, 赤玉を R, 黒玉を B と書いています.



(ア) 1か所に赤玉を4つとも入れる場合

赤玉を並べる場所を1か所選び(6通り), そこに赤玉4つを入れる. 赤玉は隣り合ってはいけないので, 赤玉4つの間に1つずつ黒玉を入れる(1通り). したがって

$$6 \cdot 1 = 6 \text{ (通り)}$$

(イ) 2か所に赤玉4つを分けて入れる場合

赤玉を並べる場所を2か所選び(${}_6C_2$ 通り), そこに赤玉4つを入れる.

(イ-1) 赤玉1つと赤玉3つに分けて入れる

赤玉は隣り合ってはいけないので, 赤玉3つの間に黒玉が2つ入り, 残り1つは他の黒玉と隣り合わなければどこでもよい(8通り). 赤玉1つと3つの2グループを2か所のうちどちらかに並べるかで2通りある.



(イ-2) 赤玉を2つずつに分けて入れる

赤玉は隣り合ってはいけないので, 赤玉2つの間に黒玉が1つ入るのが2組あり, 残り1つは他の黒玉と隣り合わなければどこでもよい(8通り).



したがって

$${}_6C_2 \cdot (8 \cdot 2 + 8) = 360 \text{ (通り)}$$

(ウ) 3か所に赤玉4つを分けて入れる場合

赤玉を並べる場所を3か所選び(${}_6C_3$ 通り), そこに赤玉を1つ, 1つ, 2つに分けて入れる. 赤玉2つの間に黒玉が1つ入るが, 残り2つは黒玉同士で隣り合わなければどこでもよい(${}_9C_2$ 通り). 赤玉1つ, 1つ, 2つの3グループを3ヶ所のうちどこに並べるかで3通りある.



したがって

$${}_6C_3 \cdot {}_9C_2 \cdot 3 = 2160 \text{ (通り)}$$

(エ) 4か所に赤玉を1つずつ入れる場合

赤玉を並べる場所を4か所選び(${}_6C_4$ 通り), そこに1つずつ赤玉を入れ, 隣り合わないよう黒玉を入れる(${}_{10}C_3$ 通り).



したがって

$${}_6C_4 \cdot {}_{10}C_3 = 1800 \text{ (通り)}$$

(ア)~(エ)より

$$q = \frac{6 + 360 + 2160 + 1800}{\frac{12!}{5!4!3!}} \cdot \frac{12!}{56 \cdot {}_9C_4} = \frac{103}{168}$$

3 **数学II** 【最大値・最小値】 **や** **難**

▶解答◀

(1) a は明らかに正である. $x^2 + (y-a)^2 = 1$ と $y = x^2$ から x^2 を消去して

$$y + (y-a)^2 = 1$$

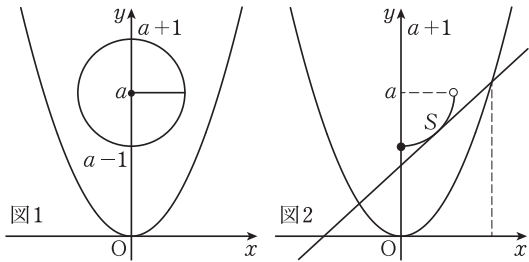
$$y^2 - (2a-1)y + (a^2-1) = 0$$

これが $a-1 < y < a+1$ の範囲に解をもたない条件を考える. この左辺を $f(y)$ とおいたとき, $f(y)$ の軸は $\frac{2a-1}{2} = a - \frac{1}{2}$ であるから, 必ず $a-1 < y < a+1$ の範囲に含まれる. ゆえに, 求める条件は $f(y) = 0$ の判別式を D としたとき $D < 0$ であるから

$$D = (2a-1)^2 - 4(a^2-1)$$

$$= -4a + 5 < 0$$

よって $a > \frac{5}{4}$ である.



(2) S 上の点 P を $(\cos \theta, a + \sin \theta)$ ($-\frac{\pi}{2} \leq \theta < 0$) とおく. P における接線は

$$(\cos \theta)x + (\sin \theta)(y-a) = 1 \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

である. これと $y = x^2$ を連立して

$$(\cos \theta)x + (\sin \theta)(x^2 - a) = 1$$

$$(\sin \theta)x^2 + (\cos \theta)x - (a \sin \theta + 1) = 0$$

4 東京大学・理科

この解を α, β とすると、解と係数の関係より、

$$\alpha + \beta = -\frac{1}{\tan\theta}, \alpha\beta = -a - \frac{1}{\sin\theta}$$

である。①の傾きが $-\frac{\cos\theta}{\sin\theta} = -\frac{1}{\tan\theta}$ であることから、

$$1 + \frac{1}{\tan^2\theta} = \frac{1}{\sin^2\theta} \text{ も合わせると}$$

$$\begin{aligned} L_P &= \sqrt{1 + \frac{1}{\tan^2\theta}} |\alpha - \beta| \\ &= \left| \frac{1}{\sin\theta} \right| |\alpha - \beta| \end{aligned}$$

となる。このとき

$$\begin{aligned} L_P^2 &= \frac{1}{\sin^2\theta} (\alpha - \beta)^2 \\ &= \frac{1}{\sin^2\theta} \{(\alpha + \beta)^2 - 4\alpha\beta\} \\ &= \frac{1}{\sin^2\theta} \left\{ \frac{1}{\tan^2\theta} - 4\left(-a - \frac{1}{\sin\theta}\right) \right\} \end{aligned}$$

$s = \frac{1}{\sin\theta}$ とおくと $s \leq -1$ で、 s の値と S 上の点は 1 対 1 に対応する。

$$\begin{aligned} L_P^2 &= s^2 \{(s^2 - 1) - 4(-a - s)\} \\ &= s^2 \{s^2 + 4s + (4a - 1)\} \end{aligned}$$

これを $g(s)$ とおくと

$$\begin{aligned} g'(s) &= 2s\{s^2 + 4s + (4a - 1)\} + s^2(2s + 4) \\ &= 2s\{2s^2 + 6s + (4a - 1)\} \end{aligned}$$

ここで、

$$\begin{aligned} h(s) &= 2s^2 + 6s + (4a - 1) \\ &= 2\left(s + \frac{3}{2}\right)^2 + 4a - \frac{11}{2} \end{aligned}$$

とおく。 $L_Q = L_R$ となる S 上の相異なる 2 点 Q, R が存在するための必要十分条件は、ある定数 c に対して、 $g(s) = c$ という方程式が $s \leq -1$ に異なる解をもつことである。ゆえに、求める条件は $g(s)$ が $s \leq -1$ のある点において符号変化する、すなわち、 $h(s) = 0$ が $s \leq -1$ の範囲に解をもつことであるから、 $h(s)$ の軸が $s = -\frac{3}{2}$ であることも合わせると

$$h\left(-\frac{3}{2}\right) = 4a - \frac{11}{2} < 0 \quad \therefore a < \frac{11}{8}$$

よって、(1) と合わせて $\frac{5}{4} < a < \frac{11}{8}$ である。

4 **数学B** 【ベクトルと図形(空間)】 **標準**
▶解答◀ (1) $P(a, b, c)$ とすると

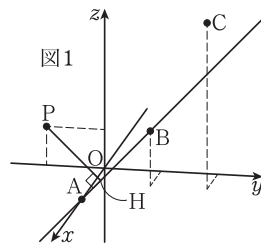
$$\begin{aligned} \vec{OP} \cdot \vec{OA} &= 2a = 0 \quad \therefore a = 0 \\ \vec{OP} \cdot \vec{OB} &= a + b + c = 0 \quad \therefore c = -b \\ \vec{OP} \cdot \vec{OC} &= a + 2b + 3c = 1 \end{aligned}$$

$$2b - 3b = 1 \quad \therefore b = -1$$

よって、 P の座標は $(0, -1, 1)$ となる。このとき、 OP と平面 OAB は垂直となり、 $OP = \sqrt{2}$ となっている。

(2) $\vec{AH} = k\vec{AB}$ (k は実数) とおくと、

$$\begin{aligned} \vec{AB} &= (-1, 1, 1) \\ \vec{PH} &= \vec{AH} - \vec{AP} \\ &= k(-1, 1, 1) - (-2, -1, 1) \\ &= (2 - k, 1 + k, -1 + k) \end{aligned}$$



また、 $\vec{AB} \perp \vec{PH}$ であるから

$$\begin{aligned} \vec{AB} \cdot \vec{PH} &= 0 \\ &= -(2 - k) + (1 + k) + (-1 + k) = 0 \\ 3k - 2 &= 0 \quad \therefore k = \frac{2}{3} \end{aligned}$$

したがって

$$\begin{aligned} \vec{AH} &= \frac{2}{3}\vec{AB} \\ \vec{OH} &= \vec{OA} + \frac{2}{3}(\vec{OB} - \vec{OA}) \\ &= \frac{1}{3}\vec{OA} + \frac{2}{3}\vec{OB} = \left(\frac{1}{3}, \frac{2}{3}, \frac{2}{3}\right) \end{aligned}$$

(3) $\vec{OQ} = \frac{3}{4}\vec{OA} + \vec{OP} = \left(\frac{3}{2}, -1, 1\right)$

である。また、 $AB = \sqrt{3}$ 、 $OA = 2$ である。

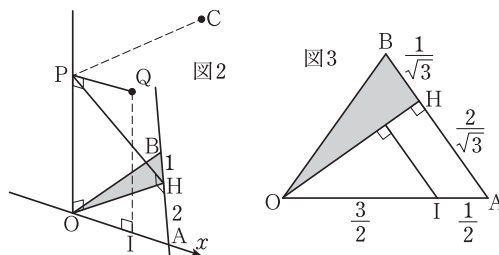


図 2 を見よ。 Q から OA に下ろした垂線の足を I とすると、四角形 $POIQ$ は長方形だから $OI = \frac{3}{4}OA = \frac{3}{2}$ となる。ここで、 $\triangle OHB$ 内の点 R に対して

$$\begin{aligned} QR &= \sqrt{QI^2 + IR^2} \\ &= \sqrt{OP^2 + IR^2} = \sqrt{IR^2 + 2} \end{aligned}$$

となるから、 IR の最大値・最小値を考える。図 3 を見よ。 IR の最小値は、 I から OH に垂線を下ろしたとき

で、その長さは $\frac{3}{4}AH = \frac{\sqrt{3}}{2}$ である。最大値は IO か IB となる。 $IO = \frac{3}{2}$ である。

$$\vec{IB} = (1, 1, 1) - \left(\frac{3}{2}, 0, 0\right) = \left(-\frac{1}{2}, 1, 1\right)$$

$$IB = \sqrt{\frac{1}{4} + 1 + 1} = \frac{3}{2}$$

であるから、いずれにしても最大値は $\frac{3}{2}$ である。よって、共有点をもつような r の範囲は

$$\sqrt{\left(\frac{\sqrt{3}}{2}\right)^2 + 2} \leq r \leq \sqrt{\left(\frac{3}{2}\right)^2 + 2}$$

$$\frac{\sqrt{11}}{2} \leq r \leq \frac{\sqrt{17}}{2}$$

5 **【数学II】**【多項式の除法】**標準**

▶解答◀ (1) $g(x)$ を $f(x)$ で割った商を $q(x)$ とおくと

$$g(x) = q(x)f(x) + r(x)$$

このとき

$$\begin{aligned} g(x)^7 &= (q(x)f(x) + r(x))^7 \\ &= f(x) \sum_{k=1}^7 {}_7C_k q(x)^k f(x)^{k-1} r(x)^{7-k} + r(x)^7 \end{aligned}$$

であるから、 $g(x)^7$ を $f(x)$ で割った余りと $r(x)^7$ を $f(x)$ で割った余りは等しい。

(2) (1)において $g(x) = h(x)^7$ として適用すると、 $(h(x)^7)^7 = h(x)^{49}$ を $f(x)$ で割った余りが $h_2(x)$ となる。 $h_2(x)$ が $h(x)$ に等しくなるとき、商を $Q(x)$ とおくと

$$\begin{aligned} h(x)^{49} &= Q(x)f(x) + h(x) \\ h(x)(h(x)^{48} - 1) &= Q(x)f(x) \dots\dots\dots① \end{aligned}$$

①の両辺で $x = 1$ とすると、 $f(1) = 0$ より

$$\begin{aligned} (1+a+b)\{(1+a+b)^{48} - 1\} &= 0 \\ 1+a+b &= 0, \pm 1 \dots\dots\dots② \end{aligned}$$

①の両辺で $x = 2$ とすると

$$\begin{aligned} (4+2a+b)\{(4+2a+b)^{48} - 1\} &= 0 \\ 4+2a+b &= 0, \pm 1 \dots\dots\dots③ \end{aligned}$$

①の両辺を x で微分すると

$$\begin{aligned} h'(x)(h(x)^{48} - 1) + h(x) \cdot 48h(x)^{47}h'(x) &= Q'(x)f(x) + Q(x)f'(x) \\ h'(x)(49h(x)^{48} - 1) &= Q'(x)f(x) + Q(x)f'(x) \dots\dots④ \end{aligned}$$

②より $h(1) = 0, \pm 1$ であるから

$$49h(1)^{48} - 1 \neq 0$$

$$2 \cdot 1 + a = 0 \quad \therefore a = -2$$

②に代入すると $b = 0, 1, 2$

③に代入すると $b = 0, \pm 1$

よって $(a, b) = (-2, 0), (-2, 1)$ が必要である。

$h_2(x) = px^2 + qx + r$ とおくと

$$h(x)^{49} = Q(x)f(x) + px^2 + qx + r \dots\dots\dots⑤$$

x で微分して

$$\begin{aligned} 49h(x)h'(x) &= Q'(x)f(x) + Q(x)f'(x) \\ &\quad + 2px + q \dots\dots\dots⑥ \end{aligned}$$

となる。

(ア) $(a, b) = (-2, 0)$ のとき

$$h(x) = x^2 - 2x = x(x-2)$$

$$h'(x) = 2x - 2 = 2(x-1)$$

⑤で $x = 1$ とすると

$$-1 = p + q + r$$

⑤で $x = 2$ とすると

$$0 = 4p + 2q + r$$

⑥で $x = 1$ とすると

$$0 = 2p + q$$

ゆえに $(p, q, r) = (1, -2, 0)$ となるから

$h_2(x) = h(x)$ となる。

(イ) $(a, b) = (-2, 1)$ のとき

$$h(x) = x^2 - 2x + 1 = (x-1)^2$$

$$h'(x) = 2(x-1)$$

⑤で $x = 1$ とすると

$$0 = p + q + r$$

⑤で $x = 2$ とすると

$$1 = 4p + 2q + r$$

⑥で $x = 1$ とすると

$$0 = 2p + q$$

ゆえに $(p, q, r) = (1, -2, 1)$ となるから

$h_2(x) = h(x)$ となる。

よって $(a, b) = (-2, 0), (-2, 1)$

6 **【数学III】**【体積】**難!**

▶解答◀ (1) 立方体の頂点を図のようにおく。Oと立方体の各面の4頂点を結ぶことによって、立方体は6つの合同な正四角錐に分けられる。正四角錐の底面を外し、どこまでも伸びる四角錐のようなものを考える。例えば、正四角錐O-ABCDの底面を外し、半直線OA, OB, OC, ODで囲まれたどこまでも伸びる四

6 東京大学・理科

角錐のようなものを半四角錐 O-ABCD と呼ぶことにしよう。

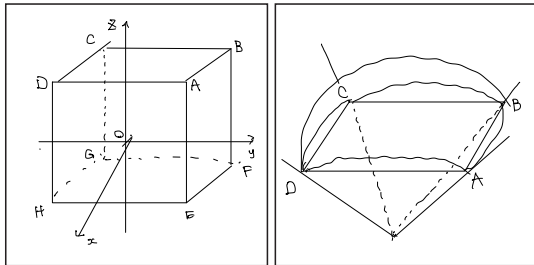
P を半四角錐 O-AEBF の内部の点とする。このとき、正四角錐 O-AEBF の表面および内部の点は条件 (i), (ii) をともに満たす。正四角錐 O-AEBF の外部の点は条件 (ii) を満たさない。ゆえに、半四角錐 O-AEBF の内部の点で条件 (i), (ii) をともに満たす点 P の動きうる範囲は、正四角錐 O-AEBF であり、その体積は立方体の $\frac{1}{6}$ であるから、 $\frac{1}{6} \cdot 2^3 = \frac{4}{3}$ である。

P を半四角錐 O-BFGC, O-CGHD, O-DHEA, O-EFGH の内部の点とするときもそれぞれ同様に $\frac{4}{3}$ ずつである。

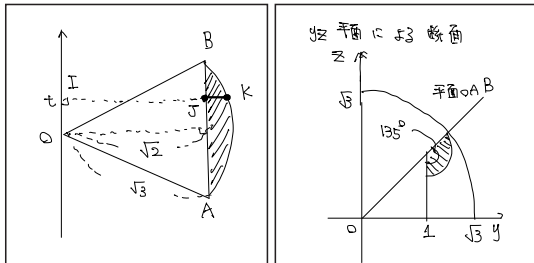
P を半四角錐 O-ABCD の内部の点とする。このとき、条件 (ii) は満たされるから、原点中心、半径 $\sqrt{3}$ の球の内部と半四角錐 O-ABCD の内部の共通部分を考える。ここで、O と立方体の各面の 4 頂点を半直線で結ぶことによってできる半四角錐は球を 6 つの合同な立体に分けるから、半四角錐 O-ABCD の内部の点で条件 (i), (ii) をともに満たす点 P の動きうる範囲の体積は球の $\frac{1}{6}$ であるから、 $\frac{1}{6} \cdot \frac{4}{3}\pi(\sqrt{3})^3 = \frac{2\sqrt{3}}{3}\pi$ である。

以上より、点 P が動きうる範囲 V の体積は

$$5 \cdot \frac{4}{3} + \frac{2\sqrt{3}}{3}\pi = \frac{2}{3}(10 + \sqrt{3}\pi)$$



(2) N を線分 OP 上に取れば、(1) と同じ状況になるから P が V 内にあるとき (iii) から (v) を全て満たす。特に、 $V \subset W$ であるから、 $\overline{V} \cap W$ の部分について考えたい。すなわち、P が V をはみ出るのはどのようなときかを考える。



N を半四角錐 O-ABCD の内部でさらに平面 OAB 上にあるとする。特に N を AB 上の点としたとき、P を平

面 OAB 内かつ $\triangle OAB$ の外側に固定すると、P の動く範囲は図の網目部分である。(iii) を満たすように P の固定を外すと P の存在領域は網目部分を AB を軸に 1 回転したものとなる。このうち、 $\overline{V} \cap W$ の部分の部分を考えると、それは網目部分を AB を軸に 135° だけ回転したものとなる。図のように座標を入ると、

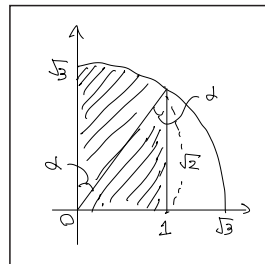
$$IK = \sqrt{3-t^2}, IJ = \sqrt{2}$$

$$JK = \sqrt{3-t^2} - \sqrt{2}$$

であるから N を AB 上に固定したときの $\overline{V} \cap W$ の部分の体積は、対称性から

$$\begin{aligned} & 2\pi \int_0^1 JK^2 dt \cdot \frac{135^\circ}{360^\circ} \\ &= \frac{3}{4}\pi \int_0^1 (5-t^2-2\sqrt{2}\sqrt{3-t^2}) dt \\ &= \frac{3}{4}\pi \left\{ \left[5t - \frac{t^3}{3} \right]_0^1 - 2\sqrt{2} \left(\frac{1}{2}(\sqrt{3})^2\alpha + \frac{1}{2} \cdot 1 \cdot \sqrt{2} \right) \right\} \\ &= \frac{3}{4}\pi \left(\frac{14}{3} - \sqrt{2}(3\alpha + \sqrt{2}) \right) \\ &= \left(2 - \frac{9\sqrt{2}}{4}\alpha \right) \pi \end{aligned}$$

なお、 $\int_0^1 \sqrt{3-t^2}$ の積分は、図の網目部分の面積として求めた。



N が BC, CD, DA 上にあるときも同様であるから、 $\overline{V} \cap W$ の部分の体積は

$$4 \cdot \left(2 - \frac{9\sqrt{2}}{4}\alpha \right) \pi = (8 - 9\sqrt{2}\alpha)\pi$$

よって、W の体積は

$$\begin{aligned} & \frac{2}{3}(10 + \sqrt{3}\pi) + (8 - 9\sqrt{2}\alpha)\pi \\ &= \frac{20}{3} + \left(\frac{2\sqrt{3}}{3} + 8 - 9\sqrt{2}\alpha \right) \pi \end{aligned}$$

要の分析 解きやすいはずの **1** がなかなか難しく、意地悪な配置である。 **2, 4, 5** はそれほど難しくないのでここで点をしっかりとって、 **3** や **6** に果敢にアタック！

(椎茸, Sakura)